

Article

アーティクル

近未来チャレンジ卒業記念対談

Interview — In Commemoration of Graduation from CREP

阿部 明典
Akinori Abe

ATR メディア情報科学研究所
ATR Media Information Science Laboratories.
ave@atr.jp

矢入 (江口) 郁子
Ikuko Eguchi Yairi

独立行政法人情報通信研究機構
National Institute of Information and Communications Technology.
yairi@nict.go.jp

本稿は 2005 年に北九州市小倉にある北九州国際会議場で開催された第 19 回人工知能学会全国大会で近未来チャレンジ 5 年サバイバルの記念として構成されたセッションの記録である。前半は矢入氏による 5 年間のプロジェクトのまとめといったトークで、学会誌 [矢入 05] と重複するところが多いので、ページ数の制約もあり本稿では割愛した。後半は、矢入氏と阿部による対談と会場からの質問である。なお、本対談は基本的に会場で録音されたものの書き起こしに基づくが、文面だけでは理解しにくいと感じられた箇所へは矢入氏が補足・説明などを施した。言葉遣いの誤りや冗長箇所は阿部の判断で訂正・削除を行った。しかし、それ以外はほとんどそのまま採録した。矢入氏がチャレンジに応募した背景、わらしべ長者的な研究の活性化など、これから近未来チャレンジに応募しようと思っっている方、潜在的な応募者の参考になるであろう。さらに、ここには、近未来チャレンジだけでなく、一般の研究にも通じる内容が語られており、非常に興味深い内容になっていると思われる。 [阿部 明典]

阿部：今、かなりアカデミックな話をしてもらって、多分、こういうまじめな文脈では話せない話などいっぱいあると思うので、それを出してしまおうと思います。最初はちょっとジャブとして……今回もニューチャレンジが 1 件しかないうえに、最近チャレンジの応募が減ってきているのですが、これを始めた者として、

どうして応募したのかをお聞きしたいと思うのです。

矢入：1999 年の全国大会で「近未来チャレンジ」の第 1 回が行われたときに、大澤さん*1、寺野先生*2 など、かなりそうそうたるメンバが、丁々発止めちゃめちゃおもしろいセッションを繰り広げたらしい、という噂を聞いたのです。それで 2000 年 1 月号の特集を見たら、やっぱりおもしろくて、これはちょっとチャレンジしてみたいと思ったのがきっかけです。今、ニューチャレンジに応募される方が少ないというのは、「5 年間サバイバルするには、こんなに地道なことをやらないといけなのかな」という例が、数は少ないけれども出てしまったのがいけないのかもしれないですね。初期のチャレンジャーのように、学問的にこんなおもしろいとか、肩の力が抜けるようなおもしろさを出せればよかったのかなとちょっと反省しています。

阿部：確かにそうかもしれないですね。企画している人に文句を言うわけではないのですが、確かに人を引きつける魅力が足りないのか、マンネリ化しているのかもしれないというのは、何となく思います。これは、結構、社会にアピールするテーマだと思うのですが、こういうテーマを、どうして思いつくのかということ

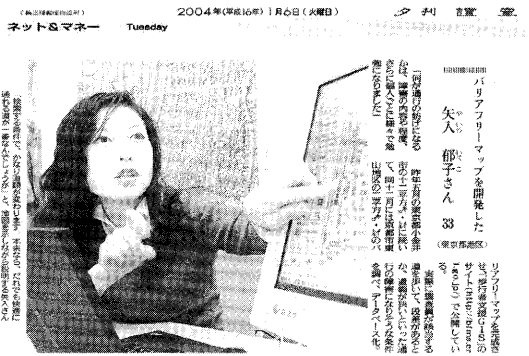
考えていたのです。昔から考えていたのか、それとも街を歩いていて、急にふっと思いつくのか、それとも何か文献を一所懸命読んでいて思いつくのか……、どんな感じでしょうか。

矢入：実は読売新聞から去年、取材を受けまして、写真がその記事（妊娠中で顔がぼつぼつで別人状態）なのですが、ここにも書いていただいたように、私の父親が、ある日、パーキンソン病の難病に認定されたことがきっかけです。手足が震えて、いずれ普通に歩けなくなって、つえを突いて歩き、さらに車いすになり、そして最後に車いすも運転できなくなって、寝たきりになる……という体の変化がものすごい速いペースで来るといわれたのが 1999 年だったのです。そのときに、人間の体が病気を契機にどんどん変わっていくということにものすごいショックを受けました。

高齢……冷静に考えれば、年を取るといって、老化によって、ゆっくりではありますが同じような変化はくるのですが、連続的にどンドン体が弱くなって、ある日突然、今の社会状況では外出できなくなって、家に閉じ込めらざるを得なくなってしまふ、というのはやっぱり根本的におかしい、と感じました。難病や高齢者の連続的な体の変化にも対応できる、いろいろな身体状況に応じた移動支援のサポートができるシステムが世の中にほしいというのが、自分自身が強く感じたモチベーションでした。

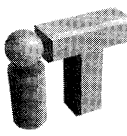
*1 大澤幸生 (当時 筑波大学, 現在 東京大学)

*2 寺野隆雄 (当時 筑波大学, 現在 東京工業大学)



誰にでも快適な道案内

「誰にでも快適な道案内」
 矢入郁子さんの「MapFree」
 矢入郁子さんは、フリーランスでフリーマップを開発した。その「MapFree」は、誰でも簡単に使える。しかも、最新の地図データを提供している。これは、誰でも簡単に使える。しかも、最新の地図データを提供している。これは、誰でも簡単に使える。しかも、最新の地図データを提供している。



さらにこのチャレンジの5年間で妊娠し出産しましたら、臨月近くになるといろいろつまずいたり、ふだん無意識で使っている段差が上がれなかったりしましたし、ベビーカーを押していますとさらに交通弱者になって、階段が通れなかったり、車道にベビーカーが流されてしまって危険だったり、ということを経験しました。

そういうことも含めて、やっぱり研究の種というのは身近なところにあると感じています。自分が身をもって理解していたり想像できるものでないと、継続することはなかなか難しいのかもしれないと正直思います。

阿部：もしかしたら、こういう立場にならなかつたら思いつかなかつたかもしれないという……。

矢入：そうですね。父が難病認定になって、父のおかげで研究ができて、苦労はしたのですが、ある意味でラッキーだったと思うことにしています。

阿部：なるほど。皆さんに当てはまるかどうかちょっと難しいのですが、多分その辺を歩いていても何か見つけるのではないかとというのは、こういう話からわかるのではないかと思います。久々に見て驚いたのですが、かなり大きなプロジェクトになっていて。最初は2人で始められたという話ですが、多分、こんなことをや

るには、かなりの人数がいると思うし、もしかしたら危険にさらされたことなどもあるのではないかと思います。また、大学や小さな研究室などでもこういうことができるのかという疑問があると思うんですが、どんな感じでしょうか。

矢入：正直言いますと、先ほどの説明でも言いましたように、一緒にやってくれる人を探していた1年目、2年目に、いろいろな人にセールスをかけて、「一緒にやらない？ 一緒にやらない？」と誘っても、誰一人として振り向いてもらえなかったときは、やっぱり、ものすごくつらかったですね。自分たちのやり方がまずかったことに後になって気がつきましたが。正直に言えば、研究をやっていくうえで、人とのコラボレーションや、人に助けていただけというのが、一番大事なんですよ。ほんとにやめたいと思ったのは、1年目、2年目くらいでした。

最終的には何人になったのかよくわからないのですが、50人ぐらいの方が深く本件に関わってくださったのではないかと思います。関わってくださった方々には、ご病気のお母さんを抱えていらっしゃる、私の父の難病認定の話にも非常に共感して、やりがいを感じてくださった方も多かったようです。

阿部：結局、共感という感じですか？

矢入：共感ですかね。でも、それだけだとやっぱり長続きしなくて、最初のとっかかりはそうだったかもしれないのですが、最後に蓋を開けてみたら、「一緒におもしろいことやっちゃいましたよね」という結果が一部の人は付いてきた、そんな感じだと思います。

阿部：研究のアピールは結構難しいと思います。ホームページなど立てている方が多いと思うのですが、それで見られるかどうかというのは、かなり疑問で。先ほど言われたように、訪問販売しても買ってもらえないとか、クーリングオフがあるとか、実際は、どういう感じで人が集まってきたのですか？

矢入：結局は先ほど申し上げたように、2001年の「近未来チャレンジ」のセッションの後に西村さん*3がご挨拶に来てくださって、一緒にやろうよとなってトントン拍子でまとまりました。そして、意外なことが……。

この「近未来チャレンジ」はサブイバルしますと、論文誌に1年に1回論文を書かせてくれて、その論文誌が無料で見られるサイトに載っているのです*4が、昭文社さんがそれをネットで検索し、プリントアウトされて、「これはどこかと商品化の研究をやっていますか？」と、お見えになったのです。そこからとんとんと商品化の話が進みました。

よくよく考えれば、「近未来チャレンジ」をやっていないと、それで「近未来チャレンジ」の成果が論文に掲載されず、掲載されてもお金を払わないと見られない、という大多数の学会のようなところでは、チャンスがゼロになってしまう可能性もあったわけです。だからそういう意味では、ラッキーが重なったのかなと思います。

阿部：確かに。論文誌を無料化するの

*3 西村拓一（産業技術総合研究所）

*4 断っておくが、出せば掲載されるわけではなく、きちんと査読のプロセスをふんでおり、不採録もあり得る。

に苦労したという話を聞いたこともあるのですが、それが結構メリットかもしれないですね。論文以外だと、どんなパターンがあると思われますか。

矢入：論文以外でおもしろかったのは、2002年に3年目のセッションのとき、私達のスタンスと真向から対立される方が会場にお見えになって、ユニバーサルデザイン VS バリアフリーデザインという観点で徹底的な議論になったのです。そのときは、その議論が「マイナスに働くかな」と思ったりしたのですが、それが逆で、ユニバーサルデザインでいくという私達の新しいスタンスを明確に打ち出せたように思います。結果として、会場からのアンケートの反応には皆さん熱いことを書いてくださったりして、非常に高く評価していただきました。それがすごく励みになってがんばれたという面もありましたね。会場でたたかれる、そのありがたみは非常にあるということでしょうか。

阿部：ああ、なるほど。確かにそう思います。それは多分、企画の方の…と一応褒めておかなければ……。

そうですね、いろいろされていると思うのですが、先ほどあったように、何かうまくいかなかったときなどはどうやって解消されたのですか。

矢入：毎年秋ぐらいになると、疲れがたまってきた段階を上れなくなるのです。そしていよいよ「下手すると過労死か」と思ったときは、草津温泉の自炊旅館に(貧乏なので自炊して泊まれる、すごい安い宿に)1週間ぐらい湯治に行って回復させるというのを繰り返したことがあります。

それ以外には、嫌なことがあると、量は飲めないくせに芋焼酎がすごく好きで、ちびちびやりながら原稿を書いたり発表の準備をしたり、何かそんな感じの、酒に逃げる、温泉に逃げるみたいな(すごいオヤジくさいのですが)。そうして解消していたかもしれません。

阿部：意外とね、この逃げるというのが重要かもしれない。余り突き詰

めると落ち込んでしまうので、その逃げを探しておくというのが重要かもしれないですね。勧められるかどうかかわからないのですが、でも、逃げというのは研究にとってかなり重要だと思うので、こういう裏話もあるということをお聞かせいただけると、すごくおもしろいと思います。

この研究は、我々が見ると、「結構社会に役立つ」と思うのですが、実際に社会からは恰好つけていると思われたい理解が得られなかったりということはあったのですか？

矢入：正直申しますと、社会は二極化しているなという実感はあります。2000年度にNHKのゴールデンタイムのニュースで全国放送されたという話を先ほどちらっとしたのですが、とにかくこの研究のコンセプト自体は、社会的にはものすごく受け入れられやすいものなので、コンセプトをイメージさせるような実験システムをつくっただけでもいろいろな新聞や雑誌に載ったり、いわゆる一般社会からは受け入れられやすかったと思います。一方で研究業界の話になりますと、今度は全然勝手が違ってきて、研究の完成度が十分ではないですし、全く受け入れられていない感じです。研究は今年度で完全に閉めて終わってしまうのですけれども、引き続き研究成果を研究業界で発表していった初めて理解されていくのかなというところですね。本当はもっと前に完成度を高めて、いろいろアピールできて、ちゃんと理解していただけるように努力できればよかったのかもしれないのですが、ちょっとそれがまだできていないという残念な状況ではあります。

阿部：確かに。研究面から見ると、意外と厳しい意見が多いのです。

矢入：そうなんですよ。

阿部：何か「できちゃったよ」ぐらいに思われてしまうということは僕らもよく感じる事なのです。それを乗り越えなければいけないと思うのですが、その「できちゃったよ」以上にするためにいろいろ脚色しているのですか。

矢入：それがもう、そんな余裕が全然なくて、こうやって物をつくっている研究というのは、「ああ、物をつくっただけじゃないの」と、自分たち自身もネガティブになって暗いループにどんどん陥ってしまうんですね。それを救ってもらえたのが、昭文社さんとの商品化の話だったり、ユニバーサルデザイン志向だったりします。ほんとに5年間の、最後の最後でですね。ちょっとだけ気が楽になったという、そんな感じです。

阿部：こういう泥くさい研究というのはあまりスマートでないので僕もそれほど好きではないのですが。そういうことを、やられているというのは、かなりすごい話です。それを世間に認めてもらえるというのは、やっぱりすごいことだという気はするのです。

矢入：いや、まだ認めてもらっていないかな……と思いますね。

阿部：そろそろ会場にマイクを渡したいと思うので、最後に一つ。最近、「近未来チャレンジ」の応募者が減っているというのもあるのですが、まず応募することのメリットとデメリット。それから、もう1回チャンスがあったら応募したいかというあたりを聞いてみたいと思うのですが。

矢入：デメリットはですね、こういう濃い担当者の方々とのヘビーな飲み会が毎年来るかなということぐらいです。毎年結構へべれけになって、攻撃されていました(笑)。メリットのほうが実は結構多くて、とにかく会場でワンセッションもって発表させていただくことによって、コラボレーションの可能性が広がりますね。それから、掲載された論文の効果というのは意外に大きいと思います。私の場合は、昭文社さんだけではなく、ほかにも情報通信の雑誌社や団体さんなどが、論文をもとに取材に来られたりしました。地味ですが意外にアピール度はあるな、というのが正直なところ。ネガティブな面は実はもう一つあって、「近未来チャレンジなんて、なんでやってるの?」と、いつもいじめられたとい

うのがあります。「お金をもらえるわけではなくて、全国大会でワンセッション組めるだけなのに」と理解されないことも多いです。

でも、そのワンセッション組めるという点が実はものすごく重要だったというのは、自分自身、この5年間やってびっくりしたところではありません。

次のまた応募したいかというご質問には、「応募してみたい」とお答えします。今回の反省としては、とにかく研究者として、自分の研究を客観的に眺めたときに、「わー、かっこええわ、あの研究」と思える要素というのが、からっきしないんですよ。よく「きみの研究は、いつも一言でわかるね」といじめられているのです。「高齢者・障害者の移動を支援する」というのは、非常に理解はされやすいかもしれないのですが、研究者を魅了する学術的な高みにある何かを打ち出せなかったの。そういうレベルでのおもしろい発想が出たら、アピールするための場として、参加させていただけたらと思います。

阿部：わかりやすいというのは、研究にとって結構重要だと思うのです。どんなにすごい人でも、わかりづらい論文を書いていると、それは誰も読んでくれないわけで、やっぱり引きつけるところというのは、まずわかりやすいってところだと思うのです。

矢入：裏話ですが、わかりやすいがゆえに、とにかく会った瞬間に、「いや、きみと同じことは、僕は20年前から言ってるよ」というようなことをいろいろ言われてしまったということもあります。結局、RCTも歩行者支援GISもそうなのですが、同じ発想の方々はいっぱいいと思います。しかし、もしかしたら論文をいっぱい読んだり、真面目に新しいものを追求されているような方々は、ほかの人の発想されるものには、おそらく手をおつけにならなかったかもしれないですね。

私はそうではなくて、「世の中で今、誰かがやらなければ！」という、モ

チベーションのほうが勝ってしまったので、手を出してしまったのかもしれない。しかし、世の中のほかの人も考えていたり、ほかでやっている人もいるかもしれないことでも、「バリアフリーデザインとユニバーサルデザインを組み合わせる、これまでにない形の移動支援システムを提案する」と話すだけで、学術的な意味づけは可能なのです。これは、これから自分自身の戒めになるべきことだと思いますが、「誰かがやっているからやらないのではなくて、誰かがやっていないようにやろう」ということです。例えば、誰もが言っているのですが、誰もつくっていないならつくってみよう、と。歩行者支援GISは、最初、主婦の方をバイトでお雇いしてつくりました。当時は「一つの市を調査して歩道のデータベースをつくるなんて、普通それは馬鹿しかやらないよ」と言われました。その馬鹿しかやらないことでもやって見せてしまったことによってインパクトがついてくる場合もありますね。今後もやっぱりこういうスタイルでやっていこうかな、なんて思っています。

阿部：そういうのは、かなり重要な話だと思います。僕らもそうなのですが、何となくスマートにやりたいなあっていう、あほな考えをもっちゃって……。

矢入：私もそうでした。全然スマートにやれなくて、それがコンプレックスになっていたことは、正直ありますね。

阿部：でも、それもやはり重要だと思うので。

少し時間があるので、会場から質問をいただきましょう。すごく深いことも、聞いてもよいと思います。

西本：東京大学の西本といいます。大変すごい成果をいっぱい出されていて、おもしろいお話でした。私は文科省の特定研究で、福祉情報工学—「情報福祉の基礎」というプロジェクトに関わっているのですが、矢入さんが今回やられたようなことは、たいていは、計画をしてお金を取って

きてお金の裏づけができてからスタートする研究だと思うのですが、矢入さんは最初にまず「やるぞ、やるぞ」という裏づけが何もなくスタートしてから、どんどんいろいろなアピールをして多分お金や人が集まってきたという感じだと思うのですが、そこが何か逆に、うまくいく秘けつみたいなものはらんでいるのではないかという気もするのですが、その辺はいかがお考えですか。

矢入：そのお金の話というのは、まさにそうでした。私の場合は研究所に就職したばかりの頃に提案はしても予算はたくさんはもらえなくて、最初の年にはICWというスクータをつくっただけだったんですね。この知的スクータをつくって見せて、さらに予算がついたらつくって見せて、ということをやっていたら、結局、所内にも賛同してくれる人が増えて、「予算をつけてあげよう」と、最終的には2001年から2005年の今（今年度終わる中期計画なのですが）、その中期計画の一つのプロジェクトになったんですね。

そういう形で結構わらしべ長者的に…。ちょっとしたお金で効果的にデモ効果があるものを見せて、それで外の人ともコラボレーションして、それを所属する組織にも対外的にもアピールして……と、雪だるま式というんですかね？ お金も人も雪だるま式でくるのかなというのは正直、実感したところでした。

西本：その最初の1個の、これをつくるというところ、[近未来チャレンジ]に応募して何か巻き込むという、その両輪で……。

矢入：そうですね、その二つでした。

西本：動かしていかれたという……。

矢入：そうですね。「近未来チャレンジ」がなかったらおそらく、組織内部的にも全然評価が違っていたと思うのです。だからそういう意味では「近未来チャレンジ」でサバイバルしていろいろ見せていくことが、内部でも評価され、お金がついて、さらにその「近未来チャレンジ」でもお金がついたことでいろいろ見せられる

ものが増え、いろいろコラボレーションも増え、と、良い意味でどんどん回っていったかなというのがありますね。

西本: あともう一つ、学術的成果というところもいろいろなお考え、おもしろいと思ったのですが。例えば、私が関わっている研究でいうと、物をつくるというよりも、どちらかというと基礎研究のほうに重点を置いて、とにかく成果を出しましょうというような感じで動いているのです。それで、物をつくるころではなかなか論文が書けないだろうから、例えばもっと認知寄りのことをやって、物をつくるのはその口実にしなさいというようなことを言われているのですが。でも、こういうのはこういうので、きちんと研究としてまとめていける方法もあると思うんですね。その辺を悩んでいらっしゃると思うのですが、いかがお考えですか。

矢入: 最初の2年間は、「こんな物づくり研究をやっても何にもならん」とネガティブで暗い悪い方向へ思考が行っていたのですけれども、あるときに、「研究になるものをつくれればいいんだ」という、開きなおりの境地に達しました。

「ヒューマンインタフェースの世界ってデザイン論とか、ユニバーサルデザインの基礎とか、そういったものを提案していだけでも、学術的な高みを目指せるのではないか」みたいなものを見つけまして、物をつくることと、物づくりの成果をうまくリンクさせるような、そういう方法を身につけていったような気がします。

西本: では、例えば従来、自分が出していなかったようなところでも、自分がこういう内容だから、どこに出したら研究成果として学術的に問えるだろうというようなことをいろいろお考えになったのでしょうか。

矢入: はい、そうですね。物をつくるときには、内部のメンバにも、実業家寄りの人もいまして、とにかく「完成度を高めるんだ、高めるんだ」みたいなことを第一に考えて実行す

る人もいるのですが、私はそうではなくて、完成度を高めるのは、産業移転すれば全然いいので、とにかくさわりのところを、物をつくって見せて、そのときにももちろん「特許や論文にならない研究はやってはいけない」という戒めを自分にかけて、とにかくつくっただけでも論文になるようなことをうまくやって、物づくりを続けていこうと思うのです。

私は機械出身のせいか、「物をつくってなんぼ」みたいな教育がどうも骨身にしみついていて、本来はおっしゃられたような、基礎研究のためのツールとして物をつくって学術的な高みを目指したいというのは野望としてあるのですが、なかなかそういうスタイルで研究ができないという弱点があります。それをある時点まで「そうやんなきゃ」と自分にプレッシャーをかけていたのですが、「物をつくったことを研究にしていこう」とスローガンを変えてしまいました。がらっと、それはほんとに、芋焼酎飲んでいて悟ったみたいな感じなのですが。

西本: でも、できることを積極的に、まず等身大のところからスタートされたという、その成功ですよね？

矢入: はい。

西本: わかりました。ありがとうございます。

阿部: ほかに何か、この場で探り出したいこととか……。

小西: 理化学研究所の小西といいます。今の質問と同じことを聞こうと思っていたので、ほとんど一緒だったんですが、一点だけ。同じ研究所内にいると、いろいろな成果の排他的な処理というか、例えば「これはどこのお金で出ているから」というようなしがるみのようなものがたくさん出てくると思うのですが。話を聞くと、外部資金というか、そういうところからは、特別、何かに応募して通ったとかいうのではなくて、どちらかというと内部の予算を回してもらうことで進められたという理解でいいのでしょうか。

矢入: はい。それと、あともう一つは、

お金のやり取りなしに、持寄りで、大学・企業・国研と共同研究をやったというのが5件ぐらいあります。あと裏話としては、経済産業省の大きな資金を得ようと思って応募した際に最終面接まで行って、かなり良い線だったのですが、落ちてしまって。ところがそこから、審査員の方に「委員会に委員として入らない？」と誘われて委員になってしまったこともありました。残念ながら、外部資金は取れなかったのですが、「応募すると落ちてでもプラスアルファがあるな」と、そんなことを感じた5年間でした。済みません、ずれちゃって、お答えになっていないかも……。

小西: いや、いや。そうですね、なるほどおもしろいですね、それは。

矢入: はい。

阿部: ほかに、いかがでしょうか。

松下: NTTの松下です。この「近未来チャレンジ」というプロジェクトに初期の頃はライバルのコントリビュータとして入って入って、おとしからは運営する側で携わらせていただいております。「近未来チャレンジ」というのは、実は内情を明かすと非常にお手前で、毎年毎年、試行錯誤しながら、苦労しながら、良かれと思っているいろいろやっています。先ほど表にあった順位が、ハテナ、ハテナになっていた2004年のものがありましたけれど、あれも、「研究に何か一つの点数をつけて順位をつけるの、どうよ」という思いがあったのですが、逆にそれが、がっかりされた要因になってしまったのかなとも思います。多面的にやったので、だから順位ではないと僕は思ったので順位をつけていないのですが。「良かれと想っていたのに」という気はします。毎年、毎年、終わると、いろいろ反省が出ます。反省が出るので、大体2人でやっているの、相方もしくは自分の中のもう一人の自分と「来年どうしようか」みたいな感じで、悩んで次の年をやるのです。よくよく考えてみたら、チャレンジャーの方に、どうしてほしい

というのを聞いたことがなかったの
で、チャレンジャーとして、「近未来
チャレンジ」をこんなふうにしてほ
しいというような意見や、思いがあ
れば教えてほしい、というのが一つ。
あとは確におっしゃるのように、こ
のところマンネリ化したのか、我々
の責任なのかわからないのですが、
ニューチャレンジが非常に少ないの
です。なので……それはおそらくで
すね、毎年毎年、死屍累々と落ちて
いくチャレンジがあるので、厳しく
見えているのではないかという気は
しているのですが。そういう、新規
参入したいと思わせるような魔法の
一言、いただきたいと思うわけですが。

矢入：そうですね、その辺はちょっと
難しいかもしれませんが……。「近未来
チャレンジ」のサバイバルの歴史を
見ると、確かに有名な先生が、そう
そうたる人を連れてチャレンジして
も、会場の人に全然評価してもらえ
なかったり、結構厳しいんですね。
それで、「じゃあ、AI学会の会場な
んてそんなに広いわけじゃないんだ
し、自分の身内だけ大量に連れて来
ればいい」といったことをやっても、
委員の方々にばれてしまって、そう
いう意味では、流れでいらっしやっ
た聴講者の方にいかにアピールして、
楽しんで帰ってもらおうとか、セッ
ション運営に細かい気遣いまでもが
要求されていて、実は企画をされた
方々が考えている以上に、ものすご
い高度なことを要求されているの
ではないかと思うのです。

でも、そこにこそチャンスがあっ
て、私のような博士を取って大学を
修了したばかりのヒラ研究員でも、
こうやって頑張っていれば評価して
もらえたり、それを元手にわらしべ
長者のようなことが起こったりもし
ます。5年間、楽しかったというの
はありますし、芋焼酎を飲んで発散
していたからという話もあるかもし
れないのですが、大変なだけでは全
然なくて、よかった面はいっぱいあ
るので、ぜひ若手の方はチャレンジ
してみるべきだと思います。

ただ、5年間を通してやるという
のは、先ほど、理化学研究所の方、
東大の方もおっしゃったように、予
算との兼合いがなかなか難しくて、
大学には、5年間の予算はなかなか
ないですよ。せいぜい長くても3
年で、その予算が終わったら散り散
りになったりもしますので、5年間
のサバイバルというのは長期すぎる
のかもしれませんが。私たち国研職員
のように、5年間の科学政策の企画
で動いている研究者というのは、び
ったり5年でいいと思うのですが、
5年というのはちょっと難しいのか
な、と。だから、例えばチャレンジ
される方は、「私は3年」、「私は〇年」
と言って卒業していくというのもし
りなのかな、と思います。

それと、今、サバイバルされてい
る方々は（私も含めてですが）サバ
イバルするためにきっちりつくり
込みをしすぎたのではないかと。「会
場の方に評価していただくには」と
か、「5年目に実用化するためには、
今何をやっておくべきか」と計算し
尽くして、きっちりやってしまった
例があると、なかなか参加しづら
いかなあとと思います。そういう意味
では、ほんとに第1回目の「近未来
チャレンジ」のときのような、なん
となく怪しく見えるセッションをや
らせてもいいのでやってみてはど
うなのかなと思います。

例えば私が5年サバイバルしたの
に、新しくしようもない研究で来年
チャレンジして、それで爆死すると
か、そういうのも若手を喚起する
意味ではありなのかもしれないです。
とにかく始まった当初は、なんだか
怪しい企画で…戦国時代みたいで、
すごいおもしろかったです。その雰
囲気が復活できるといいですね。

全国大会のワンセッションを、こ
うやって若手の人が運営して、それ
でアピールできるというのは、ほん
とにないことです。しかも、全然お
金がかからないですし、こんなにプ
ライズレスな成果が出るというのは
ないのではないかと思います。だか
らそういう意味では、失うものが

（私も全然失うものなかったの
です）ない人は、ぜひチャレンジし
てみたいかがでしょうか。こんな感
じでよろしいでしょうか。

阿部：今、矢入さんが5回通るのは大
変とか言われたのですが、これは実
は5年以内という話なので、5年以
内に達成すれば、3年で何もかも
まわらないのです。

矢入：なるほど。

阿部：毎年順々にやっていって評価し
てもらおうという話で、3年で散り散
りになっても、そこで何か、誰かと
組んでいけばいけるのではないかな
ということを思ったりしてはいるの
ですが。

矢入：もう一つ、「AIへの貢献」とい
うのが評価項目にあるのですが、私
の研究は、AIをほんとに勉強されて
いる方からすれば、全くAIではな
いのです。私はまるで気にしなかつ
たので、「もう全然いいや」と言って、
応募したのですが、まじめな方ほど
「自分の研究はAIではないから」と
躊躇されたりするのではないでしょ
うか。

だから場合によっては、「AI」と
書いてあるのを、例えば「情報通信」
というような大きな傘にしてしま
うことも応募者を増やすためには必要
なのかなと思いますね。

全国大会に来るといつも思うので
すが、「AIとは何か」と、そういう
議論を活発にしている、飲みだすと
喧嘩にまで発展してしまうような、
そんな感じの学会だと思うのですが、
あまりに狭義のAIにこだわりすぎ
て「近未来チャレンジ」のアクティ
ビティが損なわれるのであれば、そ
れを撤廃すべきではないかと思いま
す。結果的に私はAIに貢献したか
ということ、多分全然貢献していない
のです。だから、そういう者でさえ
もサバイバルできると宣伝してい
ただくと、場合によっては応募した
くなる人もいないかと思えます。

阿部：そうですね。いや、一応AI学
会なので、「AIへの貢献」というの
は書かなければいけないという義務

が最初からあるのですが。ただ、AI といっても、僕らは何も AI について協議していないのです。僕は AI をすごく広く捉えていいと思っているし、この AI 学会に参加する人がほかの学会の見地を見ながら、自分の AI を広げていくというのもいいかなと思って、ああいうことをずっと続けているわけです。研究会も、第2種などもそういう相互交流のようなことをやっていると思うのです。そういった意味で、別に、いわゆる古典的 AI に縛られる必要は全然ないと思っているのです。ヒューマンインタフェースの立場から、「私たちはこれができないんだけど、AI 学会でできる？」というのを投げてもらえれば、AI 学会の人が、「私はそれはできる」と言ってくるかもしれないし。そういう何か、研究の利益があるといいなと思って、ずっと続けているわけです。さらに、そこでコラボレーションが始まるかなということもあって、AI と書いてあっても、別にそれを情報通信から見てもいいし、さらにいえば、AI が情報通信を取り込めばいいだけの話なので、変えなくてもいいという気は何となくしてはいるのです。ただ、但し書きは入れるかもしれませんね。古典的 AI ではなくて、もっと新しい AI を見つめてほしいとか、そういうのはあるかなという気はしますね。

矢入：何か、今の企画は、まじめで慎重な方ほど参加しにくくなっているという気がしますね。

阿部：そう。だから僕らみたいに、おちゃらけじゃなきゃだめって……。

それはちょっとまずいのでね。

矢入：ええ、そうですね (笑)。

阿部：ただ、肩の力を抜いてもらうということもあって。近未来チャレンジを、5年以内に達成してほしいとは言っているのですが、なぜ5年以内かというのは、その当時、AI というのは大ぶろしきを広げているけれども、「いまだに積木を崩しているだけ」と言われている時代だったのです。それはちょっと嫌だなということで、AI も役に立つんだということアピールしようと思って、一応5年以内にできるという目標を定めていました。ただ、小規模のものはまずいので、それなりの期間を。とはいっても、100年後にできると言っても、誰もうれしくないで、一応5年というスパンを考えてつくったという感じなのです。で、5年というのは、別に5年ぴったりでなくてもいいと、僕は思っていて。それは、10年でもかまわないけれども、とにかく夢みたくないことではなくて、ある程度、地に足が着いた話をしてほしいということなのです、あれは。

矢入：グランドチャレンジではなくて、要するに、時流に合ったチャレンジを提案してほしいということですね。

阿部：ちょっと先を見てほしいという。だから目先のことでなくて、もう少し先を見てチャレンジしてほしいと。100m 走だったら 120m ぐらい見てほしいと、そんな感じなんです。

時間を過ぎてしまったのですが、もしもこの場でどうしても聞きたいという話があったら、もう1件ぐらい受け付けられると思うのですが、いかがでしょうか？ よろしいでし

ようか？ では、どうもありがとうございました。

矢入：本当に、どうもありがとうございました。

◇ 参 考 文 献 ◇

[矢入 05] 矢入郁子：高齢者・障害者の自立的移動を支援する Robotic Communication Terminals (5) —近未来チャレンジサバイバル完了に寄せて—, 人工知能学会誌, Vol. 20, No. 1, pp. 82-89 (2005)

2006年2月14日 受理

—— プロフィール ——



阿部 明典 (正会員)

1986年東京大学工学部電子工学科卒業。1991年同大学院工学系研究科電子工学専攻博士課程修了。工学博士。同年、NTT入社。NTTコミュニケーション科学基礎研究所、NTT MSC (マレーシア) などを経て、現在、ATRメディア情報科学研究所勤務。アブダクションなどの人工知能の研究を行っており、最近では、ことば工学、チャンス発見にも興味をもっている。電子情報通信学会、社会言語科学会各会員。



矢入 (江口) 郁子 (正会員)

1994年3月東京大学工学部卒業。1999年3月同大学院工学系研究科博士課程修了。同年4月郵政省通信総合研究所に研究官として入所 (2004年4月より名称が独立行政法人情報通信研究機構に変更)。2003年より主任研究員。入所から現在まで、高齢者・障害者の自立的移動を支援するRCTプロジェクト、歩行者支援GISプロジェクトに実質的なリーダーとして携わる。江口は旧姓。1997年4月～99年3月、日本学術振興会特別研究員。ヒューマンインタフェース学会第5回学術奨励賞 (2004年度)、本学会第15回全国大会優秀賞 (2001年度) などを受賞。ヒューマンインタフェース学会、情報処理学会、ACM各会員。博士 (工学)。